

大学の教育・研究の公開の試み

—卒業論文・修士論文合同公開発表会の実施と反響—

The Public Announcement of Education and Research in Our Department

-Attempt of the exhibition for public hearings of theses in public space-

○澤田 剛^{*1} 森村 茂^{*1} 栗原 清二^{*1}
Tsuyoshi SAWADA Shigeru MORIMURA Seiji KURIHARA

キーワード：公開、卒業論文・修士論文、公聴会

Keywords: exhibition, theses, public hearings

1. はじめに

平成16年度からの国立大学の独立行政法人化を目前にして、多くの国立大学で、様々な新しい取り組み、組織の改革が行われています。

熊本大学工学部物質生命化学科、ならびに大学院自然科学研究科物質科学専攻工業化学系コースでは、平成13年度から、卒業論文および修士論文の公聴会を、学外の会場を確保して、公開形式で行っています。

卒業論文や修士論文は、学生にとって大学における研究生生活の総括であり、同時に、大学の研究の最前線を示しています。これらの公聴会は、一部の大学では大学外からの参加が認められていましたが、ほとんどが、学内の会場を利用して行われているために一般の参加希望者には敷居が高く、参加していたのは大学内の関係者か、現在共同研究している企業人に限られていたのが現状です。

一方、子息を大学に送り出している父兄や、大学進学を希望している高校生、共同研究を計画している地元の企業人など、多くの一般の人々が大学の現状に興味を持っており、これからの大学に求められる情報公開の観点からも、教育・研究の現状の公開の一環として、卒業論文・修士論文公聴会を外部の施設を用いて広く一般に公開する試みを行っています。本発表では、その目的と実施計画、実施後の反省点と参加者からの反響などについて発表します。

2. 目的

公開公聴会の主な目的は以下の5点です。

1. 研究シーズの発信

大学での研究内容を企業に公開することによって、大学と企業との間での共同研究や企業化のきっかけとなることが期待されます。

2. 若者の科学技術への関心の増加

高校生に対して、大学での研究活動を、より身近な

学生の発表として示すことで、若者の科学技術に対する興味を育てて、科学技術に携わる意欲の増加を期待します。

3. 企業に対する人材のアピール

企業に対して学生の発表を公開することで、本学科の学生のアクティビティをアピールします。また、企業人と学生の間で直接に討論することで、お互いに面識を得る機会を与えることが期待されます。

4. 地域社会との提携

閉鎖的といわれている大学の研究を、学生の発表会という形で地域社会に公開することで、大学の現状を一般の方に知っていただき、また、発表する学生の父母に大学教育の成果を理解していただくことを期待します。

5. 学生のアカウンタビリティに対する自覚の育成

現在、社会に研究成果を公開しなければならないという、アカウンタビリティという考え方が広がりつつあります。学生に、専門家でない一般の人に説明する機会を与えることにより、社会の中での研究の位置づけについて自覚させる重要な場となることが期待されます。

3. 実施計画

公開公聴会は、若手教官を中心にワーキンググループを設置し、以下のような手順で準備を進めました。

1. 会場の選定
2. プログラムの作成
3. 外部への案内
4. 当日の役割分担

会場は熊本市内にある熊本市総合女性センター (<http://www.city.kumamoto.kumamoto.jp/shisetsu/josei.htm>) で、修士論文の口頭発表会場として研修室、会議室を4部屋、卒業論文のポスター発表会場として多目的ホールを借用しました。発表件数は修士論文(口頭発表)が40-50件、卒業論文(ポスター発表)が90-100件です。この中には、企業との共同研

*1 熊本大学工学部物質生命化学科

究、および特許申請のために公開できない研究が十数件含まれています。これらの発表は会場に関係者以外の立ち入りを禁止して非公開で行いました。

外部への案内としては、まず学生の父兄に招待状を送付しました。宛名書きは学生本人にお願いし、まとめて送付しました。また、共同研究している企業だけでなく、地元の企業全般にも案内状とポスターを送付しました。高校生への案内としては、県の教育センターを通じて、各高校に案内状およびポスター配布を行い、地元のテレビ局、新聞社などにプログラム、ポスターなどを送付しました。

当日の役割分担としては、受付を修士1年生と文部技官にお願いし、教官は、修士論文の口頭発表の際には、担当の会場を決めて質疑応答を行いました。卒業論文のポスター発表と修士論文の口頭発表が重ならないように時間を調整し、ポスター発表は昼食時間の前後1時間半の2回に分けて行いました。

4. 実施後の反省点と参加者からの反響

会場設営は前日の夕刻から準備しました。もっとも手間のかかったのは、ポスター発表用のボードの搬入です。会場も十数枚の展示用ボードは所有していたのですが、50枚近くなると大学から持ってくる必要がありました。

また口頭発表の資料は、プロジェクターを使用するPowerPointに統一して、前日までに学生にデータを提出させ、用いるパソコンで動作確認を行いました。スムーズな進行のために各講演会場ごとにMacintoshとWindowsの2台をディスプレイ切換器で常に接続し、資料をコピーしておきました。

特に学生への指導としては、内容を説明する際に、できるだけその背景などの情報を加えるようにして、専門外の人にもわかりやすく行うなどの指導も行い、学生も例年以上に準備して発表に望んだようです。

平成13年度と14年度の2回行いました。13年度の反省としては、以下のような点が挙げられました。

1. 父兄、高校生の参加が少なかった。

具体的には父兄の参加者が6, 7名、高校生の参加者が2, 3名で、非常に少なかった。これは公聴会が平日の金曜日に行われたために、仕事を持っている父兄、学校がある高校生が参加できなかったものと思われる。

2. 質疑応答できる発表が限定された

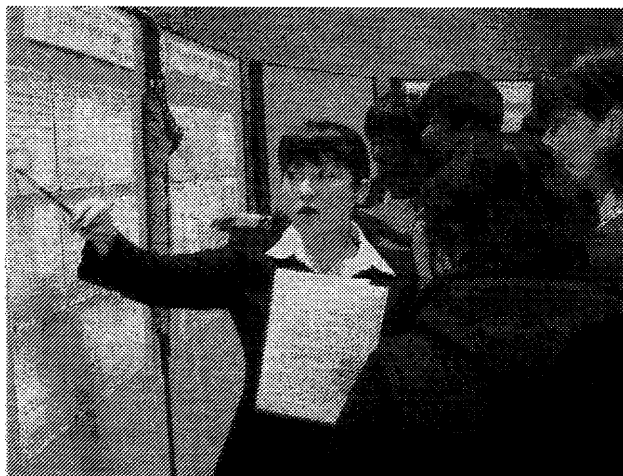
当日、口頭発表会場は4つに分かれており、教官は決まった会場に常にいることが求められました。その場合、他の会場での発表に参加することは不可能になり、限られた発表にしか参加できないことになりました。

以上の2点をふまえて14年度にはいくつかの変更を加えました。まず公聴会は2月末の土曜日として、父兄、高校生が参加しやすいようにし、特に高校生については積極的に高校訪問して案内を行いました。また発表会場については、午前と午後で教官が会場を移動することで、本質的な解決ではありませんが、多くの種類の発表について質疑できるようなプログラムを組みました。

この結果、14年度の参加者は、企業から17名、高校教師2名、保護者48名、高校生3名、その他4名総計74名(参加者総計197人)となり、明らかに向上しました。ただし高校生については、ちょうど試験期間に当たり、参加者が少なかったのは本年度の公開公聴会の課題です。

参加者へのアンケートの結果、大学でどのようなことを研究しているのか分かって有意義だったとの意見が8割以上の参加者から得られましたが、研究内容については、分かったというものは、3割程度でした。保護者から「来年は参加しないが、学生(大学)がどのようなことを研究しているのか一般の人に知ってもらうのには大変よいことだと思います。」「入学希望者にも案内すると学部学科の内容がより理解しやすく、効果もさらにUPすると思う。」などの意見が得られ、また企業からの参加者から、「有益な情報を得た。」「来年度も参加したい。」などの意見が得られました。

このように、学外の施設で卒業論文・修士論文の公聴会を公開することは、ある程度の肯定的な評価を得ており、大学での教育・研究活動を公開しようという試みとして有益であると思われます。現在、本年度の公開公聴会の準備を進めており、問題点を克服し、有意義な内容となるように計画中です。



卒業論文のポスター発表の様子